THE TOKYO TOILET Art Project with Wim Wenders

- Project News vol.01 -

ヴィム・ヴェンダース監督、役所広司を迎えて アートプロジェクトの始動を世界に発表

このたび、常に挑戦的に活動、日本でも絶大な人気を誇るドイツ出身の映画監督・ヴィム・ヴェンダースが自身の最新作を渋谷を舞台に撮影することが決定しました。ヴェンダース監督がその趣旨、社会的意義に賛同したTHE TOKYO TOILET プロジェクト。このプロジェクトでは、世界的に活躍する16名の建築家やクリエイターがそれぞれの個性を発揮して、2020年から東京・渋谷区内17カ所の公共トイレを新たなデザインで改修し、現在までに12カ所が完成しています。それは、従来のイメージを刷新、日々の生活に共存するアートに昇華されており、現在日本だけでなく海外からも大きな注目を集めています。

今回、ヴェンダース監督は現在の東京、渋谷の街、THE TOKYO TOILETで改修された公共トイレを舞台に映像製作を行います。2011年以来の来日、東京・渋谷の街並みやプロジェクトのトイレ等を視察しながら、シナリオハンティングを敢行予定。記者発表では、TTTプロジェクトに参加している建築家の安藤忠雄と長谷部健渋谷区長を迎え、このアートプロジェクトの魅力や、監督が改めて見つめる東京・渋谷の変貌、そして”アート”は私たちに何を問いかけるのかを語りました。

いいことがあったひとも、
そうでもないひとも
何かから逃げているひとも、
何かを探しているひとも
恋をしたひとも、
狂気に支配されそうなひとも
酔っているひとも、
眠くてたまらないひとも
みんなトイレにいく。

トイレとは、
人間はみな同じなのだと気がつかせてくれる。
そういう場所なのかもしれない。

壁をこえるアイデアを
思いついたことがある。
誰かを傷つけてしまうかもしれない言葉を
送るのをやめたことがある。

ひとりになることが難しい今
私たちは少し急ぎすぎている。
トイレがくれるその小さな時間が
ときどきそう言っている気がする。

渋谷に生まれたこのトイレたちを、

私たちはどれだけ長く大切に使い続けることができるか。

このプロジェクトはそのチャレンジのために始まりました。

このトイレがいつまでも清潔に保たれていたら、

それは東京という街の心の美しさをそのまま写す鏡のようなものになる。

その美しさこそが、これからの東京の文化になる。

そう信じています。

このThe Tokyo Toilet には、特別な清掃員たちがいます。

365日、トイレを快適にするために働いています。

彼らを主人公にしたアートフィルムを

Wim Wenders 監督と、俳優の役所広司さんと制作します。

アートはきっと私たちに何かを語りかけます。

それは答えのないものかもしれません。

だからこそ忘れがたいものになるのかもしれません。

The Tokyo Toilet が、私たちに何を語るのか。

ご期待ください。

撮影は年内、公開は2023年を予定。

くわしくは追って発表いたします。

Wim Wenders

ヴィム・ヴェンダース、1945年生まれ。70年代のニュー・ジャーマン・シネマ時代を生み出した一人でもあり、現代映画界を代表する映画監督。

数々の賞を受賞している『パリ、テキサス』(84)や『ベルリン・天使の詩』(87)などの代表的長編作以外に、『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』（99)『Pina/ピナ・バウシュ 踊り続けるいのち』（11）『セバスチャン・サルガド 地球へのラブレター』（14）『ローマ法王フランシスコ』（18）など、数多くの斬新なドキュメンタリーなども手がけている。

ヴェンダースは監督だけではなく、プロデューサー・写真家・作家としても活動を広げている。彼の撮影した写真は世界中の美術館で展示されており、写真集やフィルムブック、彼が書いたエッセイと共に出版もされている。

現在妻ドナータ・ヴェンダースと一緒にベルリンに在住。
2012年に夫妻はデュッセルドルフにNPO財団「ヴィム・ヴェンダース財団」を立ち上げ、ヴェンダース作品の復元と共に視聴者がいつでもアクセスできるように作業を進めている。また、この財団を通して若いアーティストに「Wim Wenders Grant」を授与するなど、次の世代の映像作家たちを支える活動も行っている。

役所 広司

1956年1月1日生まれ。96年には『Shall we ダンス？』『眠る男』『シャブ極道』で国内の映画賞で主演男優賞を独占。

また、東京国際映画祭 主演男優賞を受賞した『CURE』(97)、カンヌ国際映画祭 パルムドールを受賞した『うなぎ』(97)、同映画祭 国際批評家連盟賞・エキュメニカル賞を受賞した『ユリイカ』(01)など、国際映画祭への出品作品も多く、数々の賞を受賞している。

05年には『SAYURI』、続く06年にはカンヌ国際映画祭 監督賞、エキュメニカル賞、ゴールデングローブ賞 作品賞、米アカデミー賞 作品賞にノミネートされた『BABEL』に出演。

近年では17年の日本映画祭「ニッポン・コネクション」(ドイツ)でニッポン名誉賞、シンガポール国際映画祭でもシネマ・レジェンド賞を受賞。19年のアジア全域版アカデミー賞「第13回アジア・フィルム・アワード」では、特別賞 Excellence in Asian Cinema Awardと『孤狼の血』で主演男優賞をダブル受賞。
その他にも、国際映画祭 フィルム・マドリッド(08・スペイン)では『象の背中』の演技で最優秀俳優賞、ドバイ国際映画祭(11)のアジア・アフリカ部門(『キツツキと雨』)やシッチェス・カタロニア国際映画祭(14・『渇き。』)でも最優秀男優賞、シカゴ国際映画祭(20)では観客賞のほか、01年の主演男優賞(『赤い橋の下のぬるい水』)以来、19年ぶりに最優秀演技賞(『すばらしき世界』)を受賞するなど、国際的にも高い評価を受ける。

09年には主演の『ガマの油』で初監督を務める。12年には紫綬褒章を受章。

今年6/17には日本で『峠 最後のサムライ』(小泉堯史監督)の公開を控えている。